WEB版
菊陽町図書館
少女雑誌の部屋だより

わすれなぐさ

VOL.28／2022.7

少女雑誌の部屋から

大正期から昭和初期にかけて広告絵や雑誌の挿絵で一世を風靡した高畠華宵。日本に入ってきた西洋の流行をいち早く取り入れて和洋折衷の装いを作り出し、斬新な着こなしを提案するなど、ファッションリーダー的な存在としても注目されていました。繰り返されるレトロブームにおいても、この時代のモダンな装いや小物使いは変わらぬ人気です。華宵はどのような生涯を歩んだのでしょうか。

高畠華宵

Kasho Takabatake

1888-1966

愛媛県生まれ。本名は幸吉。
明治44（1911）年に描いた津村順天堂の婦人薬「中将湯（ちゅうじょうとう）」の広告絵が評判となり、挿絵を描くようになる。
『少女画報』、『少女倶楽部』、『少女の友』、『少女の國』などの少女雑誌だけでなく、少年雑誌、婦人雑誌に至るまで様々な雑誌の挿絵を手掛けた。美しくも妖しい魅力の少年・少女、流行の最先端のファッションに身を包んだモダンガールを描いて一世を風靡。作品のみならず、華宵の存在そのものが憧れの的となる。昭和6（1931）年以降は、挿絵の仕事を少しずつ減らし、日本画制作に励む。戦後は子ども向けの絵本や単行本などを手掛けた。

中将湯

華宵の知名度を上げるきっかけになったのが津村順天堂（現・株式会社ツムラ）が販売した「中将湯」の広告絵でした。「中将湯」は明治期より販売されていた婦人病の薬でしたが、華宵の図案で暗いイメージを刷新。トレードマークの中将姫もモダンなものに変え、印象的なキャッチコピーとともに消費者の販売意欲をかきたて、大成功を収めました。

華宵好み

華宵は、着物、帯、髪型、履物、小物などをトータルコーディネートして提案しました。商品化されて百貨店で購入できるものもあり、実用的ながらも、おしゃれに品よくまとめられていました。優雅でモダン、最新流行のファッションに身を包んだ女性は「華宵好み」と呼ばれ、その人気ぶりは昭和3（1928）年の流行歌『銀座行進曲』の中で「華宵好みの君がゆく」と歌われたほどです。

華宵便箋

大正14（1925）年～昭和14（1939）年頃、便箋会社4社が主に売り出した「華宵便箋」が女学生の間で大流行しました。
表紙絵と便箋用紙、封筒がセットになっており、最新モードの少女や、憂いをたたえる美少年など、様々な図案が描かれていました。
少女雑誌の中にも広告が掲載されるほどの人気ぶりでした。

華宵事件

大正14（1925）年になると、すべての講談社系の雑誌から華宵の絵が突然姿を消してしまいます。前年の秋、『少年倶楽部』や『少女倶楽部』などで圧倒的な人気を集めていた華宵が、画料問題のこじれから講談社の全仕事を引き揚げてライバル誌に移ってしまったためです。出版界には衝撃が走りました。
昭和12（1937）年に和解しています。

主な参考文献▶▶▶『高畠華宵画集』（河出書房新社）、『華宵のおしゃれ教室』（河出書房新社）、『高畠華宵 大正・昭和★レトロビューティー』（河出書房新社）

♪♪　5/19～7/14　企画展「少女雑誌の中に見る 熊本ゆかりの人々」開催中です　♪♪